

タマネギ

タマネギは、9月上中旬ごろ(彼岸まで)までをめに播種します。定植は、早生系統で10月下旬、中晩生系統で11月中旬までに行いましょう。病害虫ではべと病、黒斑病、灰色腐敗病、アザミウマ、ヨトウムシなどに注意します。

■ 病害編

べと病

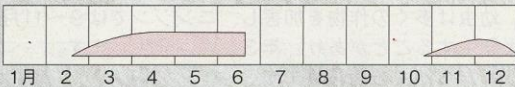
春または秋季のやや低温で雨の多い時に発生が増加します。はじめ、葉に周辺部がぼやけた淡黄色の楕円形病斑ができ、多湿時には病斑上に白～白灰色で霜状のかびが見られます。葉は病斑のできた部分から湾曲し、被害が激しいと病斑から上部が枯れます。秋季に苗床で感染した株を定植すると、株が黄化して生育不良となり、枯死する症状が見られます。

飛散胞子による2次感染が多く、周辺部に不明瞭な黄色楕円形病斑を形成し、生育が悪くなり、激しい場合には枯死します。



▲べと病

▲べと病(初期症状)



黒斑病

4月上旬以降、気温の上昇するころから発生が増加します。葉および花茎に発生し、はじめ、葉に白色小斑点を生じ、やがて、融合拡大して淡褐色楕円形病斑になり、時には長径3～5cm程度の輪紋のある大型病斑ができます。病斑中央部には褐色～黒色かびを生じ、表面に多数の胞子が見られます。



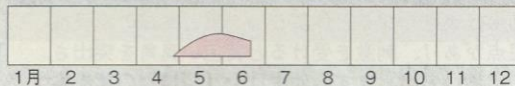
軟腐病

鱗茎の肥大期から発生しはじめ、外葉の葉鞘部が灰白色～淡褐色軟腐状に腐敗し、葉が倒れ、鱗茎部が腐敗して株は枯死します。被害株ではタマネギの鱗茎部を指で押さえると白濁液が出て、独特の臭いがします。被害株発生圃場では、収穫後のタマネギに腐敗の発生が見られます。

病原菌は土壌中に生息する軟腐病菌(細菌)で、降雨による土壌の飛散で広がり、昆虫による食跡、傷口から感染します。



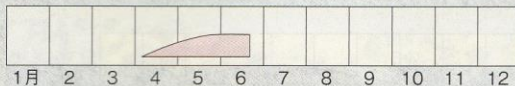
▲(田中 寛 原図)



灰色腐敗病

地際部の葉鞘や鱗茎表面に灰白色の病斑を生じ、やがて褐色～赤褐色になり、葉は黄化して下垂し、地際部が軟腐状に腐敗、葉鞘と鱗茎の表面に灰色粉状のかびが生じます。

収穫後のタマネギにも発生し、表面が赤褐色～淡褐色になり、鱗茎の首から肩部分にかけて灰色粉状のかびを生じ、鱗茎表面に黒色の菌核が形成され腐敗します。被害発生圃場から収穫したタマネギでは、貯蔵中に腐敗が発生することがあります。



白色疫病

葉の先端部が白～淡褐色になって下垂する症状が見られ、春先に雨の多い年は発生が増えます。はじめ、葉に暗緑色で水浸状の病斑ができ、拡大して青白色の病斑となり、葉は病斑部で折れ曲がり下垂して枯れます。排水の悪い圃場で発生が多い傾向があり、高畝栽培にするなど排水対策が有効です。

